

第 14 回国際ダニ学会議報告

ウェスタンオンタリオ大学

日本学術振興会海外特別研究員

鈴木丈詞 (tsuzuki2@uwo.ca)

1) はじめに

第 14 回国際ダニ学会議 (International Congress of Acarology ; 以下, ICA) が, 2014 年 7 月 14~18 日の 5 日間, 京都テルサ (京都市) で開催された。

4 年に 1 度の ICA は, サッカーワールドカップと同じ年に開催される。この開催年の一致は, たまたまではあるが, 私自身は, ICA を「ダニ学のワールドカップ」と位置付けている。とはいえ, 予選などがあるわけではなく, 基本的に申し込みさえすれば誰でも参加可能である。私は, 前々回 (アムステルダム) と前回 (レシフェ) に続き, 3 回目の参加である。なお, 今回は, 世界各国から約 300 名のダニ研究者たちが夏の京都に集結した。

2) 植物ダニ学の動向

前回の ICA と比べ, 植物ダニ学の分野では, 網羅的遺伝子解析の発表数が格段に増えた。特に, ハダニの薬剤抵抗性および寄主適応性の研究で, この傾向が顕著であった。これは, 前回の ICA の翌年に, M. Grbic 博士らによってナミハダニの全ゲノム情報が解読されたことが大きい (*Nature* 479, 487-492, 2011)。

現状では, 転写物 (RNA) の総体であるトランスクリプトームを対象とし, マイクロアレイや次世代シーケンサ (RNA-seq) を用いて網羅的に解析した発表が多かった。しかし, 恐らく既に, プロテオームおよびメタボローム (それぞれ, タンパク質および代謝物の総体) を対象とする解析も進められているだろう。つまり, 植物ダニ学も「オミックス」をキーワードとするビッグサイエンスの時代にいよいよ突入した。関連セッションの会場は, そのような新しい時代を感じさせる, 躍動感あふれる空気が流れていた。

さて, 私は現在, 上記 M. Grbic 博士の研究室にて, トランスジェニック植物や人工餌を用いたハダニの遺伝子

サイレンシングについて研究している。今回の ICA では, 他の研究チームによる同様の発表があり, 非常に参考になった。同時に, ハダニの遺伝子サイレンシングは, 今後さらに多くの研究者が参入する分野になることが予想された。そのような, ややコンペティティブな空気が流れ始めた会場で, 当の M. Grbic 博士は「コンペティションではなく, これからはコラボレーション (以下, コラボ) の時代である」と力説し, 聴衆の意識転換を促していた姿が印象的だった。以下は, その「コラボ研究」の活性化をゴールとし, 粗削りながら, 私が実験的に企画した特別セッション「My Favorite Acari」について紹介したい。

3) 特別セッション「My Favorite Acari」

始まりは半年前に遡る。岡部貴美子博士 (森林総研) から, 今回の ICA における若手主導のイベント企画の依頼をいただいた。若手にとって貴重なチャンスをいただいた喜びの一方で, しばしば大きな不安に襲われ, 後者をお酒でごまかす夜が続いた。ただし, ダニ学におけるコラボ研究の活性化をゴールとするビジョンは, 種火として早期に着いていた。では, そのコラボ研究の活性化には何が必要か?

当然ではあるが, 何よりも, 研究者間のコミュニケーションが欠かせない。そして, 徐々に相互理解を深めながら信頼関係が構築され, 最終的にコラボ研究に発展すると考える。そこで, その最初のコミュニケーションを生むための土壌作りを本企画の目的とした。国際会議の 1 つのセクションという限られた時間, かつ, 共通言語としての英語はあるが, それを主言語としない参加者が多い条件を勘案すると, 論理に基づき, 言語的手法を駆使する通常のプレゼンテーションよりも, 時に一瞬で多

くの人を魅了する非言語的手法を駆使する発表が、目的達成には有効であると考えた。非言語的手法の代表的なものはアートである。そこで、アートとダニ学とコラボさせて、ダニ研究者間のコミュニケーションを推進するイベントを企画した。

国内外の若手ダニ研究者を中心に呼び掛けたところ、計 24 名の発表者が集まった。以下、大きく分類すると、これまでの ICA では見られない異色な発表内容となった：ダニ CG、ダニ PC ゲーム、ダニムービー、ダニイラスト、ダニクラフト、ダニ絵本、ダニ書道およびダニオペラ。詳細なタイトルおよび発表者リストは ICA の Web ページ (<http://ica14.acarology-japan.org/>) を参照されたい。

当日は、会期後半にも関わらず、予想以上の参加者数だった。趣向を凝らした発表と美味しいお酒が潤滑油になり、ダニ研究者間のコミュニケーションが多数生まれている状況を目にすることができた。また、最後の北嶋康樹博士（茨城大学）によるダニオペラでは、ダニへの愛と、力強い歌声が相まって、会場に一体感が生まれた。あの場にいたダニ研究者たちは、今後も ICA が開催される度、あの情景を共に思い出すだろう。

帰り際、とあるシニアのダニ研究者が、「ICA における歌は今回が初めてではないよ」と、こっそり教えてくれた。約 50 年前に開催された第 1 回の ICA（フォートコリンズ）でも歌の企画があったようだ。時代は移ろいながらも繰り返す。

4) おわりに

本会議参加のための渡航費として、報農会から援助をいただいた。通常、国内の学会等の渡航費援助プログラムでは、日本で開催される国際会議は対象とされず、海外在住の若手研究者や学生は自費で参加するケースが多い。そのような状況の中、今回、援助を決定していただいた報農会には、その深いご理解に感謝申し上げますと共に、本援助プログラムは、今後も、植物防疫分野の若手研究者や学生が、より活発に、安心して日本と海外を行き来するための強固な礎として、日本の農学、そして農業の活性化に大きく寄与するものと確信している。



小嶋健氏（住友化学）と共同企画したシンポジウム「Behavior and Sensory Ecology」における発表者：左から、小嶋氏、Le Goff 博士（ルーヴァン・カトリック大学）、Michalska 博士（ワルシャワ生命科学大学）、鈴木。



ホテルグランヴィア京都で開かれた懇親会にて。現在のボス夫妻（左：V. Grbic 博士，右：M. Grbic 博士；共にウェスタンオンタリオ大学）と舞妓さん。



特別セッション「My Favorite Acari」における発表者。写真提供：關戸智恵氏（京都大学）。